

11月3日(金) シンポジウム 第6室(209)

意味論・語用論から見た「コミュニケーション」 (Semantic and Pragmatic Analyses of “Communicability”)

JACET 中部支部誤文研究会

(石橋千鶴子、稲葉みどり、梅澤敏郎、榎本喜夫、木村友保、
丹下省吾、原田邦彦、藤吉陸夫、前田アンドレア、宮田学)

司 会 丹下省吾 (名古屋外国語大学)
提案者 榎本喜夫、原田邦彦、稲葉みどり

趣 旨

日本人が書いた英作文において、コミュニケーションを下げる要因を明らかにし、より効果的なライティング指導に役立てる。

研究の経緯

JACET 中部支部誤文研究会では 1996 年よりライティングの指導法の研究を進めてきた。初期の「治療的指導」の研究(丹下他,1997)では作文の内容よりもむしろ綴り、語順、語法、構文等の形式上の誤りの矯正に重点がおかれていた。そこで、当研究会では、作文が実際のどの程度読み手に理解されているかという視点から、木村(1996)が提案した「コミュニケーション」(伝達度)という概念を用いてコミュニケーションを妨げる致命的な誤用の解明と対処法を模索してきた。先ず、木村(1996)の研究を発展させ、英作文 150 件をデータベース化し、より客観的、数量的な分析を可能にするために、コミュニケーションを測定する尺度を考案した(丹下他,1998)。次に、作文における誤用を言語理論の枠組みの中に位置づけ、コミュニケーションに関わる要因を数量的に分析し、総括的な結果を報告した(Tange et al., 1999)。

今回のシンポジウムでは、コミュニケーションを下げる重要な要因と判明した意味論的誤り、語用論的誤りをとりあげ、誤用と読者の理解を妨げる要因を作品例に即して考察する。尚、これまでの研究成果は Tange et al. (2000) に報告書としてまとめた。

提案の概要

1. コミュニケーションに影響を及ぼす諸要因

誤文を文法的に分析・分類することは比較的詳しく行われているが、必ずしも誤文がどれ位通じるかということに関連づけて行われてはいない。本研究では、確立された言語理論に基づく明確な基準で、先ず誤りを文法的、論理的、意味論的、語用論的誤りの4分野に厳密に分類し、更にそれぞれの分野において、誤りがどのような直接的(下位)要因によるものなのかを特定し、コミュニケーションにどのように、どの程度影響を与えているかを分析する。

一方、誤り(誤文)でも、その意味が完全に、あるいはある程度理解されるものと、全く理解されないものがある。この理解度を左右する要因にはどのようなものがあるかを提案し、それらがどのように意味の理解を助けているかも究明する。そうすることにより、誤りの深刻度も明らかになると考えられる。

2. コミュニカビリティを下げる致命的要因

英作文 150 件に見られる誤りをすべて拾い出してみると、圧倒的に文法的誤りが多く、その次に意味論的誤りと語用論的誤りがくる。これは時間的に限られた英語教育を受けてきた高校生の英作文がデータであるので予想されたことである。しかし、コミュニケーションを下げる致命的要因を見てみるとその数は逆転し、意味論的誤りと語用論的誤りがそれぞれ文法的誤りを上回った。これは、日本人が書いた英文は文法的誤りが多くて通じにくい、とする一般的な見方に反するものである。

3. コミュニカビリティを下げる要因：意味論からの分析

意味論的誤りを含む例文を取り上げ、個々の誤りを分析し、何がその文の理解を妨げているかを探る。同時に、誤文であっても、コミュニケーションが損なわれていない場合、その理解を促した要因は何であるかをも分析する。結果として、1) 語彙選択の誤り、日本語からの直訳(語彙および統語面)および日本語の使用というコミュニケーション阻害要因の主たるものが、いずれも学習者の語彙不足に起因していること、また、2) 誤文であっても文脈と背景知識によって理解を助けられている、という二点が確認された。文脈および背景知識が読む者に的確な推測を可能にしてくれ、理解を促すのである。

4. コミュニカビリティを下げる要因：語用論からの分析

語用論的誤りの範疇に分類された六つの下位範疇(VAG, AMB, MLD, PUD, REF, MTP)について、作文の事例に基づき、コミュニケーションを下げる要因を考察する。特に、書き手の意図と読み手の解釈の相違に着目し、背景知識、スキーマ、文脈、談話構造、首尾一貫性、指示、推論、前提等の語用論に関わる概念を援用して分析を進める。分析の手順は、英作文の誤用を指摘し、書き手による日本語訳との照合、読み手(ここでは英語話者)のコメントや修正又は書き換えられた文などを手がかりに、実際にどのような解釈の食い違いが起きたのかを示すと同時にその原因を究明する。

5. ディスカッション

シンポジウムでは本研究の分析結果を紹介し、コミュニケーションとライティング指導への応用について参加者のみなさんと意見交換する予定である。

参考文献・資料

- 木村友保. (1996). 「生徒の書いた英作文のコミュニケーション」. *Step Bulletin*, 8, 120-126.
- 丹下省吾他. (1997, June). ライティングと誤文指導. 大学英語教育学会中部支部大会発表, 名古屋外国語大学、日進市.
- 丹下省吾他. (1998, September). 日本人の書いた英作文の「コミュニケーション」—尺度化の原理と応用. 第37回大学英語教育学会全国大会発表, 就実女子大学、岡山市.
- Tange, S. et al. (1999, August). "Communicability" and Its Relevance in EFL Writing Classes. Paper presented at the 12th World Congress of the International Association of Applied Linguistics (AILA '99 Tokyo), Waseda University, Tokyo, Japan.
- Tange, S. et al. (2000). "Communicability" and Its Relevance in EFL Writing Classes. The Sentence-Error Study Group, the Chubu Chapter of JACET.